

# 祥瑞としての山車

——亂世を統べるかたち——

## 緒言

祥瑞の起源は戰國に遡る。『禮記』「中庸」には「國家將に興らんとすれば、必ず禎祥あり。」と言われるように、古くから國家の生起に缺かせないものとされ、改元や封禪など重要な國家的事項と關わってきた。しかし、その種類と數が一氣に増えるのは、後漢の讖緯說の興隆を受けてのことである。唐に至ると、祥瑞は品第分けがなされるようになった。その嚆矢である唐の玄宗『大唐六典』の最高品第の大瑞には、鳳凰や龍など今なお馴染みの深い祥瑞もあるが、中には實態不明なものも少なくない。その一つに山車という「車」に關する祥瑞がある。<sup>(1)</sup>そこで唐代における山車の語を見ると、<sup>(2)</sup>祥瑞としての山車、<sup>(3)</sup>(b)百戲に關わる山車、の二種に大別されることが分かる。こ

松 浦 史 子

のうち(b)をめぐる研究は祭祀・演劇研究の一環として存在するものの、(a)「祥瑞としての山車」についての專論はみあたらない。<sup>(3)</sup>

他方、例えば動亂の魏晉六朝において、鳳凰の出現にも關わらず王朝は滅亡したという後漢以降の歴史を合理的に解釋するため、本來鳳凰と共に五鳳とされた五方の神鳥「發明、焦明、鸛鷯、幽昌」が凶事の要素を帯びようになり、六朝から唐に至るまで無視出来ない重要な凶鳳として畏れられたように(松浦二〇一一、孫二〇一二)、<sup>(4)</sup>ある祥瑞の受容を辿るとき、時に吉凶の方向が變わるほどに、それが受容された時代の社會文化的文脈の影響を受けることもあった。よって本論では、唐には重要な祥瑞として記録された「山車」の成立と受容について、漢唐間の社會・文化的背景とともに考察することとする。

## 1 車の瑞のはじまり

## ——『禮記』『禮運』にみる車馬の瑞

まず、「車の瑞」の起源を辿ってみる。儒家の經典の一つ『禮記』『禮運』には、「故に天其の道を愛します、地其の寶を愛します、人其の情を愛します。故に天は膏露を降し地は醴泉を出し、山は器車を出し河は馬圖を出す、云々」という一連の祥瑞記述がある。王者が禮に叶った政治を行えば天地山河等がそれぞれに瑞物を出すという件をめぐる留意すべきは、これらが讖緯説の影響を受ける前の纏まった祥瑞描寫であること、また、そのうちの「山の出す器車」が「車」に關する最古の祥瑞記述であることである。しかし後漢末の鄭玄の『禮記』『山は器車を出す』に對する注釋には、「器は銀甕・丹甕のごときを謂ふなり」とのみあり、祥瑞としての山車の語は用いられない。さらに『周禮』『匠人』に記される柏車についての鄭玄注に言及のある山車もとくに祥瑞として扱われないことを斟酌すると、漢末の鄭玄の段階では、「山の出す車の祥瑞」の存在はあっても「祥瑞としての山車」は語として固まっていけない可能性が高い。<sup>(6)</sup>

後漢から魏晉に掛けて、車の瑞は、馬の瑞とセットのものととして、①敕令や王都賦など國家を頌讚する文書、および②異物異聞を誌した博物書・志怪書に現れる。例えば後漢・黃香「九

宮賦」「根車に乗り、神馬に駕す」、魏・文帝「讓禪第三令」「河、未だ良馬を出さず、山、未だ象車を出さず、云々」、晉・張華『博物志』「和氣相い感ずれば則ち朱草生じ、山は象車を出し、澤は神馬を出す、云々」などがあり、「車」の瑞は概ねが山や河澤の出す「馬」と一對の瑞として描かれるものの、「山車」という語を詠む例はない。このような車馬に關する祥瑞の展開において山車の語は、②の後秦の王嘉『拾遺記』において初めて確認される。<sup>(7)</sup>車は黃帝の創造物であるとの説を踏まえ、選ばれるのが澤馬と一對の山車であるが、しかし②に類する山車の語はこの黃帝の瑞としての一例に留まり、その含意も判然としないのである。

そこで本論では、唐の行政法典に重要な祥瑞として記録された「山車」のイメージの基盤は、六朝後半の美文家達による國家的文章において築かれたものと推測する。本論の主な目的は、「祥瑞としての山車」が六朝美文家の如何なる文書において、如何なる含意を持った祥瑞として示され、また受容されたことで唐には重要な祥瑞としての地歩を得るに至ったのかを明らかにする点にある。以下、それを検討してみたい。

## 2 徐陵における山車

## 2-1 徐陵の公文書にみる二つの山車澤馬

北朝では北魏の六鎮の亂以降、軍閥の割據時代へと突入し、

南北朝も末に至ると北朝の政治・軍事的優勢は顕らかになった。このような情勢下、南朝・梁王朝に仕えた文人徐陵は北朝に赴任中に起こった侯景の亂のせいで、主君蕭淵明とともに北の地に拘留された。この間、北齊の名の下になる公文書を起草したのは徐陵であったとされる。その徐陵の公文書には、「山車」の受容史上、重要な役割を果たした二つの用例がみえる。一つめは、五五五年、北齊の政治的傀儡であった主君・貞陽侯（蕭淵明、のちの閔帝）の名を借り徐陵が南朝の陳霸先に送った「爲貞陽侯與陳司空書」。二つめは王僧辨亡き後、敵方であった陳霸先の庇護下に入った徐陵が五五七年、陳霸先が次代王朝の皇帝たるべきことを説いた「冊陳公九錫文」である。この二つの公文書に見る山車は常に澤馬と一對のものとして示される特徴がある。まず山車を大瑞たらしめた、最も大きな要因と思われる後者の用例からみてみたい。

九錫文とは、魏晉南北朝の王朝交代に関わる重要な公文書である。清の趙翼『廿二史札記』『九錫文』には、禪讓がなされる前には必ず九錫文を作り、次代王朝の帝王たるべき人物の優れた功績を列挙したこと、この風習は三國魏の曹操に始まり晉・宋・齊・梁・北齊・陳・隋に受け継がれたこと、それらは王朝を代表する秀作とされたことが述べられる。<sup>(8)</sup>魏の曹操に始まる禪讓の手順とは、次のものである。まず有力者が公位・王位を與えられ九錫を貰うとそれに應じた祥瑞がある、一旦は王位を

固辭するが最後にはやむなく王位を受ける、という形式を採り、このような禪讓に先立つ九錫文の發布は、王朝交代劇の第一段階とされていたと言ってよい。趙翼の按語に據れば、概ねの形式は漢魏の禪讓に際し作られた潘勗の九錫文に固まるとされ、その内容は①序文↓②「此又公之功也」で締められる次代皇帝の功績羅列↓③爵位・九錫賜與の順に展開される。徐陵の九錫文における山車は、この②次代皇帝たる陳霸先の功績羅列のクライマックス場面で、その功德が天に感應したことを述べる一文「公有濟天下之勳、重之以明德、凝神體道、合德符天」に続く次の描寫にみえる。

是を以て天には蘊寶無く、地には呈祥あり、滴露卿雲、朝に團まり曉に映ず、山車澤馬、服馭して閑に登る、既に圖書に景煥たり、方に史牒に葳蕤たり。<sup>(9)</sup>高勳は象緯を踰え、積徳は高華に冠たり、固より徳として稱ふものなし。<sup>(10)</sup>

陳霸先の功德に應じ天が多く瑞物を降すこの描寫において、「天の瑞としての滴露卿雲」と一對の「地の瑞としての山車澤馬」が、『禮記』禮運の「天の瑞としての膏露」「地の瑞としての醴泉」という天地の出ず祥瑞を繼承することは明らかである。しかし、歴代の九錫文には、次代皇帝の功德に對する祥瑞として、山車や澤馬を示す例はない<sup>(11)</sup>（後述）。では徐陵はどのような政治的、文學的文脈を踏まえて、王朝交代の第一歩となる公文書のうち、次代皇帝たるべき陳霸先の功績を讃える最重要の

場面において、歴代の九錫文に用例のない「山車澤馬」という瑞を示したのだろうか。またその含意はどのようなものか。

## 2-12 徐陵の山車の淵源（一）

### 王融「三月三日曲水詩序」にみる澤馬・器車

2-2-1 山川の出す車馬の瑞——漢の封禪と受命の儒家的祥瑞  
その答えを探る手がかりの一つは、徐陵に先行する南朝の文學にあるものと考えられる。竟陵王を中心とする永明文壇のメンバーである王融の「三月三日曲水詩序（以下、曲水詩序）」は、四九一年（永明九年）上巳の日、芳林園での曲水の宴に参加した四十八名の曲水詩に對する序文であり、南齊・武帝の敕命により作成された。王融の代表作として『文選』にも收められる當文について、徐陵の山車澤馬との關わりで注目すべきは、次の一文である。

天瑞は降り、地符は升起、澤馬は來り、器車は出で、紫脫は華<sup>はな</sup>き、朱英は秀で、佞枝は植<sup>お</sup>ひ、歷草は孳<sup>は</sup>り、雲は潤ひ星は暉<sup>は</sup>き、風は揚がり月は至り、江海は象を呈し、龜龍は文を載<sup>お</sup>す。

「澤馬來、器車出」という車馬の瑞が詠まれるのは齊の武帝の德に應じ天地が瑞を出す場面においてであり、徐陵の「山車澤馬」はこれとの關わりが示唆される<sup>13)</sup>。しかし陳霸先の功績を言祝ぐ最重要の瑞として、「車馬の瑞」を王融から繼承した文

脈や、この祥瑞の持つ含意や淵源については深く考えられることはなかった。よって本論では王融と徐陵が詠む「器車・澤馬」「山車・澤馬」が共に山澤の出す瑞である點に注目し、まず後漢以降に増える「山川の出す車馬の瑞」の來歴と含意を探ることとする。

漢代には、祥瑞と深く關わるものとして封禪がある。皇帝が自身の天下統治の成功を天に報じ謝する儀禮であり、一般に、封は泰山の山頂に壇を築き天を祀り、禪はその山麓で地を清め山川を祭るものとされる。その封禪について例えば前漢・武帝の封禪をみても、天子の善政に對して天の降す祥瑞は、重要な位置を占めることが分かる。封禪における祥瑞の重要性を物語る代表的文學作品は、前漢・司馬相如の封禪文であろう。周と漢に出現した符瑞を比べ、漢の祥瑞が周のそれより豊富であることをよりどころとし、前漢の武帝に封禪舉行の妥當性を上奏している<sup>14)</sup>。『文選』では「符瑞」に篇類され、『文心雕龍』「封禪」でも、古代聖王を上回る漢武帝の明德を祥瑞を基準に讃ずる文とされるもの<sup>15)</sup>の、しかし、司馬相如の封禪文に詠まれる祥瑞はいずれも緯書に依據するものではなく、山川の出す祥瑞も車馬の瑞も確認されない。

これに對し後漢になると、天人相關の緯書の影響下、祥瑞は多く天命を知らせる存在となり、儒家的政治思想と深く結びつくようになる。とくに光武帝による圖讖革命において、その受命・

封禪の根據となる緯書には儒家の經書と同等の權威が與えられ、<sup>(16)</sup>このような緯書に關わる祥瑞は、儒家的禮制と政治的に結合しつつその數と種類を増やしてゆく。後漢・班固の『白虎通』封禪に記録される多様な祥瑞はその代表例であり、有人格の宗教的主催者たる天と、その命を受けた地上の統治者たる天子の間に「孝」を中心とする儒家的な父子關係が、緯書の神祕的世界を踏まえ示される點でも注目されている。<sup>(17)</sup>王者の善政に感應し天地・八荒・草木・鳥獸・山陵・淵泉・八方が各種瑞物を出すという、『白虎通』封禪にみる一連の祥瑞描寫をめぐっては、前漢の封禪文との對比において次の點が留意されるべきだろう。すなわち、『禮記』の「山出器車、河出馬圖」とともに、緯書『孝經援神契』「德至山稜、則澤出神馬」を踏まえる「山出器車、澤出神馬」が認められる點、<sup>(18)</sup>つまり、經書のみならず緯書に基づく神學的な儒家の瑞として、「山川の出す車馬の瑞」の例が確認されることである。他方、同じ『白虎通』「封禪」によれば、封禪は、皇帝による易姓告代の「祭天儀禮」であると共に、山川の神々を祀る「山川祭禮」であつたとされる。<sup>(20)</sup>古來、皇帝による山川祭祀は封禪に限らない。しかし、後漢以降に増える山川の出す車馬の瑞の含意を知る上で看過できないのは、後漢における封禪は、皇帝を頂點とする儒教國家の形成に貢獻したとされること、<sup>(21)</sup>その後漢の封禪について多くを傳える『白虎通』「封禪」の、緯書由來の祥瑞記述に至って初めて、封禪に關わ

祥瑞としての山車（松浦）

る祥瑞として「山川の出す車馬の瑞」が現れることである。

以上を踏まえ、次の推測が可能ではないか。後漢の再受命の基盤となる讖緯說の興隆に伴う形で、「天子の受命」を天下に示すものへと政治的變容を遂げた「天地山川の儀禮・封禪」由來の「山川の出す車馬の瑞」は、それが天の權威を背景とする後漢の儒教的な封禪世界に起源すると共に、禮制秩序に冠たる受命の天子の至高性を可視化する山川の瑞であるため、後漢以降、とくに「受命の王權・天子」を嘉する主要な儒家的祥瑞とみなされるようになった。ゆえに、魏晉以降、受命の國家・皇帝を言祝ぐ文章に多く用いられたのではないか、ということである。「山川の出す車馬の瑞」が、例えば、漢に代わる儒家的禮制國家を目指した魏晉以降の禪讓關連文——「象車・良馬」（曹丕「讓禪第三令」）「河、未だ良馬を出さず、山、未だ象車を出さず、云々」など——において受命の王朝・皇帝の正統性を可視化する瑞として詠まれたことも、それを傍證する。一方、こうした儒家的禮制と深く關わる國家文書において、「山川の出す車馬の瑞」が當時興隆をみた佛教的な祥瑞に代替されなかつたことも、その重要な證左と言えるだろう。<sup>(22)</sup>本論で注目する王融「曲水詩序」に示された「山の出す器車」と「澤馬」、徐陵「九錫文」にみる「山車」と「澤馬」もまた、王權天授を象徵するものとして發展をみた、このような儒家的祥瑞「山川の出す車馬の瑞」の系譜を踏まえるものと考えられる。では、それ

らはどのように運用されたのか。南朝の修辭的公用文にみてもたい。

## 2122 永明の修辭的公用文からの繼承と發展

### \* 緯書由來の祥瑞とその政治性

徐陵と王融における車馬の瑞の關わりをめぐって看過してはならないのが、王融が永明期を代表する美文家であること、徐陵が永明の修辭文學の影響を受ける點である。森野繁夫氏の王融「三月三日曲水詩序」に關する論考によれば、王融の「曲水詩序」は先行する顏延之の同題作品と較べ南齊武帝の盛業を言祝ぐことに心した作品であり、そのために緯書などに基づく多くの祥瑞描寫を特徴とする、という。<sup>(23)</sup> 實際、顏延之は劉宋の高祖が「聖武」によって天下平定をしたことを嘉する祥瑞を控えめに描き、その典據にも緯書を用いないのに對し、王融は序文冒頭に、蕭齊は劉宋のような「武力革命」ではなく「天命」により譲りを承けた正統王朝であることを讃え、本文中には齊武帝の受命と治世の成功を讃えるものとして多様な瑞物を詠んでいる。そして、概ねが緯書（禮緯）に由來するこの祥瑞描寫の冒頭に掲げられるのが、「澤馬・器車」なのである。修辭という形式論にのみ限定すれば、その富麗な文辭で評判となつた王融の修辭的美文においては、受命の天子を讃える「山川の出ず車馬の瑞」を踏まえた「澤馬器車」は、王朝を言祝ぐ華麗な修

辭の一つとして機能するものといえるだろう。しかしこれが南齊武帝の受命を嘉する王朝贊文である以上、そこに示された緯書由來の祥瑞は、その軍人皇帝による禪讓革命を正當化する政治性とは無關係ではありえない。徐陵が梁陳の禪讓文「冊陳公九錫文」に詠む「山車澤馬」は、緯書由來の祥瑞を、受命を言祝ぐ政治的修辭として用いた永明期の王朝贊文に見る儒家的な車馬の瑞を繼承するものと考えられる（王融「曲水詩序」の祥瑞同様、山車が緯書「禮緯」に基づくことについては次章213に述べる）。

### \* 徐陵「冊陳公九錫文」における修辭と祥瑞描寫

他方、徐陵の九錫文にみる文飾の問題については、道坂昭廣氏により重要な指摘がなされている。氏によれば、徐陵の文學に革新적であつたのは、彼の文學の源とされる永明文學の主導者たる竟陵王の八友の、例えば王融・沈約・任昉の文と比較すると、四六隔對のような當時の南朝最新の文學的技巧を、九錫文などの文飾を用いにくい、政治の場と關わる實用的公文書に取り込んだ點にある、という。<sup>(24)</sup> とすれば、歴代の九錫文において初めて徐陵が「山車澤馬」という祥瑞を詠んだ要因の一つは、政治的象徴性と不可分である緯書由來の祥瑞を修辭として用いる南朝美文の修辭法を、九錫文のような古風な文體を特徴とする實用的公文文に取り込んだ、革新性に求めることができるのではないか。



徐陵が「九錫文」に試みた新たな修辭的技巧は、王融と徐陵の文書における車馬の瑞をめぐる描寫の差異にも認められる。

三・四句を基調とする王融「曲水詩序」の祥瑞描寫では、器車は他に多くの瑞と共に羅列的に示されるのみで、天の瑞の對句としての地の瑞としては示されない（原文は注12）。これに對し、徐陵の九錫文の祥瑞描寫は「天の瑞・甘露慶雲」との對偶を徹底した形で「地の瑞・山車澤馬」が示され、その文體も祥瑞の説明部分を加えると四・六句の駢文の形を採る（原文は注10）。この點からすれば、徐陵「九錫文」では四六隔對などの當時最新の技巧を用いる一方、陳霸先の功績を集約的に嘉する祥瑞描寫において新たに對偶表現を徹底したことで、その受命を讃える山車澤馬の莊嚴で煌びやかなイメージは、より鮮明なものになったと考えられる。<sup>(26)</sup> 實際、徐陵以前の古典的文體を採る九錫文では、次代皇帝の功績羅列のクライマックス場面において、これほど多くの祥瑞が對偶を徹底した駢文を以て華やかに描寫される例はない。<sup>(27)</sup> では、新たな修辭的技巧が試みられた徐陵「九錫文」の祥瑞描寫において、『白虎通』や王融に見る『禮記』の「山の出す器車」を繼承せず、「山車」に詠みかえたのはなぜか。

## 2-3 徐陵の山車の淵源 (二) 史書にみる殷の瑞山車

### 2-3-1 魏晉の史書「輿服志」―皇帝の金根車と殷の瑞山車

徐陵が王融の「器車」を「山車」に詠み替える理由は、恐ら

祥瑞としての山車（松浦）

く六朝以降の國家文書——史書の輿服志の車の起こりの説明部分に示される「山車」に求めることができる。その嚆矢が西晉の司馬彪『續漢書』輿服志の車制に示される「皇帝の車」の説明にみえている。まず序文では、禮服には身分の尊貴には隔たりがあり、その順序は徳により褥麗の度合いが決定されると言い、「山車」に金根の飾りがあり豪奢な裝飾がなされるのは、天子の至高の徳を顯彰するためであることを説く。<sup>(28)</sup> さらに天子の乗物について述べた部分で司馬彪は、秦漢が手本とした上古の車をめぐり、

①秦は天下を并せ、三代の禮を閱、殷の瑞・山車、金根の色と曰ふこと或り。②漢は秦制を承け、御を乘輿と爲す。

いわゆる孔子の殷の路に乘る者なり。（晉・司馬彪『續漢書』第二九「輿服志上」）

と、のちの輿服志においても重要な要素となる、孔子に關する殷の瑞・山車を示す。夏殷周の文化や儀禮を重視した孔子が殷の轂を理想的なものとして賞賛したという『論語』衛靈公第十五にみるエピソードを踏まえるものだが、①②の敘述は羅列的であるため全體の關連性が捉えにくい。そこで『續漢書』輿服志の撰述にあたり司馬彪が典據としたという魏の董巴「大漢輿服志」に遡ると、皇帝の金根車の由來をめぐる次の内容であることが明らかになる。董巴の説明によれば（原文は注30）、①殷の瑞・山車が金根の色であったため（その金色に耀く豪奢さか

## 中國詩文論叢 第三十五集

(31) 殷の人はこれを大略、すなわち天子の車とした、(32) そこで秦始皇帝は（この殷の瑞・山車に倣って）金根の車を造り、漢は（殷の瑞である金根の山車に倣い大略を金根車とする）秦の車制を繼承して乗輿とした、という（括弧内松浦）。つまり「金根色の殷の瑞・山車」こそは孔子が讃えた殷の輅の正體であり、それがのちに漢も繼承することとなる秦始皇帝の造った「金根車」の由來なのだ、ということである。このように、儒家的禮制を統べる皇帝の至徳の可視化である豪奢な金根車を、殷に現れた金根色の山車の神話傳説に結びつけた記述の上限は、三國魏の董巴『大漢輿服志』であり、これ以前には遡らない。(33)

## 2-3-2 宋齊の史書の車制にみる山車

## — 緯書による補説と神祕化

梁・沈約『宋書』『禮志』の車の起こりを説明する部分にも、殷の瑞・山車が重要な瑞として引かれている。

『明堂位』に曰く…「鸞車、有虞氏の路なり。大路、殷路なり。乗路、周路なり。」殷に山車の瑞あり、桑根車と謂う、殷人制して大路と爲す。『禮緯』に曰はく「山車、垂句す。」句は、曲なり。揉治せずして自ら曲るを言ふなり。…秦は三代の車を閲、獨り殷制を取る。古に桑根車と曰ひ、秦に金根車と曰ふなり。漢氏は秦の舊に因りて、亦た乗輿と爲す、いわゆる殷の路に乗る者なり。（梁・沈約『宋書』）

## 「禮志」卷十八

司馬彪にはない情報として留意すべきは、『禮記』明堂位「大路、殷路也」に對する鄭玄注「漢の祭天、殷の輅に乗るなり。今、これを桑根車と謂うなり。」を踏まえ「殷に出現した瑞・山車は桑根車と言ひ、殷の人はこれを大略に定めた」と説明し、この殷の瑞山車＝桑根車を秦漢の金根車の前身とみなす點、そしてその殷の瑞山車の説明として「山車は垂句す」という緯書『禮緯』の佚文を引き、「山車は強制しなくても自ら曲がつて生成されたもの」との説明を施し示すことがある。このような山車の内容は緯書『禮斗威儀』で「山車は垂句す。自然の車である」という記述にも符合しており、(34) 『宋書』卷二十九符瑞志で山車が「山の精である」とする記述も、基本的に『宋書』禮志引『禮緯』の山車と同系統のものである。つまり沈約『宋書』禮志の車の興りの説明部分では、皇帝の金根車の由來説明として、魏の董巴の輿服志より繼承される孔子の言説に關する殷の瑞＝山車説をベースとしつつ、鄭玄の殷の輅＝桑根車説とともに、禮緯や『宋書』符瑞志が別途引く「山が王徳に感應して自然に生成される車」という山車の瑞との整合性を付けようとするのである。『南齊書』の輿服志においては緯書への信賴はいっそう篤く、先の『宋書』に引かれる『禮緯』の同文を殷の瑞・山車の最重要の典據として引くのみでなく、この一文を輿服志の冒頭に据え、「昔、三皇は祇車に乗り谷口を出、夏氏は奚仲



を以て車正と爲す、殷に瑞車あり、山車の垂句とは是なり。」  
 と言い、車の起源を三皇時代から説き起こし、そこに續けて『禮緯』の「山車垂句」の記述とセットのものとして殷の瑞車である山車を示す。

魏晉南北朝時代、漢に代わる強固な儒家的禮制國家の再構築が目指されるなか、史書の車制は禮制秩序の可視的表現として重要な役割を果たした。このような禮制の展開にあつて儒家的禮制に冠す皇權を象徵する金根車天子の乗り物と同一視された神話的な山車の瑞が、六朝後半の史書に至り、緯書によって神祕化された現象は、該期の史書において祥瑞の専門志が獨立したことに恐らく無關係ではない。後漢以降、禪讓という名の武力篡奪を経て亂立した数々の王朝の受命が、天人相關の緯書説や、それをよりどころとする祥瑞により保證される政治思想的趨勢の下に誕生したのが、沈約『宋書』祥瑞志や蕭子顯『南齊書』祥瑞志である。これらは正史における祥瑞専門志として通史的にみても稀有であるのみならず、そこには緯書に重複する神話上古の聖人帝王の祥瑞受命の記述が多く採録される。とくに、『宋書』祥瑞志は、正史初の祥瑞總覽としても歴史的價值が高い。その編者である沈約が齊梁禪讓革命の立役者とされ、讖緯・緯書の世界に通じた人物であることからすれば、<sup>(37)</sup> 皇帝の金根車の前身たる「殷の山車」という神話傳説的な祥瑞に對し、沈約が、天の權威を背景とする緯書の神祕説を以て説明を加えた筋道が見

えてくるだろう。

しかしここで看過してはならないのが、『宋書』卷二九符瑞志下に記録される山車の掲載順位である。唐の『大唐六典』では山車は車の瑞の筆頭に掲げられるのに對し（注1参照）、『宋書』祥瑞志にみる車の瑞は金車・象車が始めに示され、その後根車があり、卷末に至って初めて山車が記されるように、山車の優先順位は低い。またそこに「金根車の前身」殷の瑞山車に關する言及はなく、このような現象は、『南齊書』祥瑞志も同様である。さらに『宋書』禮志（卷十八・志第八・禮五）の車の制度の沿革をみても、東晉以降に車の制度が一度斷絶したことが誌され、その末尾には「大明中、始制五路俱出。」あるように、實體としては宋の後半になって初めて重要な路（輅）車の制度も備わって來るのである。これらの點からすれば、宋の段階では、天子の至德の象徵物でもある金根車皇帝の乗り物の淵源「殷の瑞山車（殷の輅）」と、緯書を踏まえた神祕的な「自生する山車」は未だ共通のイメージとして權威化されていたと言ひ難い。ではこれが共通のイメージで語られ、重要な祥瑞としての地歩を固めるのはいつ頃のことであろうか。

## 2-3-3 徐陵における緯書・史書の山車の一體化

### — 王融・沈約との關わり

いま注目すべきは、「冊陳公九錫文」における「山車澤馬」

に對し、徐陵が續けて「既に圖書に景煥たり、方に史牒に歲蕤たり。」と述べる點である（原文は注10）。この記述を踏まえれば、徐陵が陳霸先の至德を言祝ぐための最重要の瑞として甘露慶雲と共に選ぶ澤馬と一對の山車は、緯書（圖書）にみる「自生する山車」と、史書（史牒）に伝えられる金根車（皇帝の乗り物）の前身たる「殷の瑞山車」の雙方を踏まるものとして認識されていた、と解することができよう。

徐陵「九錫文」において初めて、山車が史書と緯書の雙方を踏まえ示された文脈をめぐっては、やはり沈約との關わりが見逃せない。なぜなら、沈約は王融と同じ永明期の修辭文學の一翼を擔う美文家でもあり、徐陵の修辭文學にも少なからぬ影響を與えたとされるためである。すでに沈約との間に指摘される文學的繼承性とともに、梁陳禪讓文において徐陵自ら史書の山車に言及する點を勘案すれば、徐陵が王融の器車澤馬のうち車の瑞のみ「山車」に詠み替えたのは、修辭的美文の先達でもある齊梁禪讓の推進者・沈約の公用文（史書）において、緯書により神祕化された皇帝の金根車の前身「豪奢な殷の瑞山車」があるため、と考えられるのではないか。

以上を纏めると、歴代の公文書において初めて、徐陵により示された澤馬と一對の「山車」の淵源については、二つあるといえる。一つめは、後漢の讖緯説を吸収した儒敎の國敎化を背景に、國家・政治的要素を強化した天地山川の皇帝祭祀・封禪

を基盤としつつ、魏晉以降、とくに南朝の修辭的王朝讃文において「受命の天子の至高性」を象徵するものとして詠まれた儒家的な「山川の出す車馬の瑞」である。徐陵の「山車」が「澤馬」と一對の「山川の出す車馬の瑞」であるゆえんもここにある、またそのイメージの直接的源泉は、先行する永明の美文家王融の修辭的國家贊文に示された「山の出す器車」と「澤馬」に求められる。

二つめは、魏晉以降の儒家的禮制の要諦でもある史書の車制において、皇帝の至德を可視化するものとして地歩を得、劉宋以降の史書に至っては緯書により神祕化された、秦漢以來の金根車（皇帝の乗り物）の前身「殷の瑞山車」である。徐陵における金根車と一體化したこのような山車のイメージは、王融同様、永明の美文の一翼を擔った沈約の史書に示された山車に求められる。新たな修辭的技巧を取り込んだ徐陵「九錫文」に掲げられる金色に輝く神話的な山車の瑞は、禮制秩序の頂點にあるべき受命の皇帝權威を、さらに美的かつ神祕的に輝かすものとなったであろう。しかし徐陵における山車の瑞は、儒家的禮制に冠たる受命の皇帝の至德を神祕的に可視化するものであると同時に、もう一つ重要な含意があった。

## 2-4 山車の持つ「武力」のイメージ

—唐の皇帝本紀に見る「戰勝を導く山車」の淵源

先に、唐代の山車には、(a)祥瑞としての山車、(b)百戯に關わる山車があることを確認したが、(a)についてさらに唐代の用例を見ると、(a-1)皇帝の祭天儀禮文みる「皇帝を讃える山車の瑞」(a-2)史書の皇帝本紀にみる「戦勝を導く山車の瑞」のあることが分かる。徐陵における山車のもう一つの含意を考えるため、本項ではまず(a-2)の山車の例を、初唐成立の『梁書』『武帝本紀』にみてみたい。

天監…十年…冬十二月癸酉、山車、臨城縣に見はる。庚辰、馬仙琕、魏軍を大破し、斬馘十餘萬にして、胸山城を剋復す。…宕昌國は遣使し、方物を獻ぐ。(唐・姚思廉『梁書』

卷二「武帝中」)

ここに描かれるのは、梁武帝の天監の御代、南朝の將軍馬仙琕が北魏軍を胸山に撃破し大勝を収めた、という著名な胸山の戦いに現れた「戦勝を導く吉兆」としての山車である。臨城縣の胸山(今の山東省臨朐縣)は、北魏と南朝梁の戦いの前線基地である。そこに「山車」が現れたあと、梁軍は北魏軍を撃破し胸山城を奪回した、というのである。いま、唐の史書に示さる「武力」に關わるこのような山車の瑞をめぐり注目すべきは、これが、實際に出現した祥瑞としての山車の最古の記録である点である。梁武帝の御代に臨城縣に出現した山車については、唐代成立の『梁書』のほか『南史』(卷六「梁本紀」)『建康實錄』(卷十七「梁高祖武皇帝」)、宋代成立の『冊府元龜』(卷二

祥瑞としての山車(松浦)

〇二「祥瑞」等に見え、唐以降にも、梁武帝の御代に出現した記録すべき山車の瑞とされたことが分かる。では、初唐に至り突如としてこうした武力に關わる山車が現れたのかといえはその可能性は低く、何らかの文脈を踏まえるものとするのが妥当であろう。これに對し本論では、唐の史書の皇帝本紀に示された山車の「武」のイメージの淵源は、六朝末の徐陵の山車澤馬に求めることができるものと考ええる。

九錫とは禪讓に際して次代皇帝に與えられる九つの品物のことだが、山車のもつ「武」の要素との關わりで重要なのは、その九錫の第一品に掲げられるのが、車馬である点である。その「車」が帝位を象徵する最重要のものであるとともに「皇帝の軍事力」を意味したことについては、例えば九錫文の形式が固まった魏晉以來、その九錫賜與の場面に描かれる九錫の第一品「車馬のうちの車が、「大輅(皇帝の車)」及び「戎輅(皇帝の兵車)」とされることにも象徴的に示されるだろう。つまり魏晉以降の九錫文においては、「大輅」とともに「兵車」が一對のものとなって初めて、皇帝たることの最も重要な品物である「車」の象徴性が完成したものと考えられるのである。<sup>(41)</sup>しかし、魏晉以降の禪讓文にみる「車」が皇帝・帝位の重要な象徴物であったにも關わらず、歴代の九錫文に「車の瑞」が詠まれるのは六朝末の徐陵「冊陳公九錫文」を待たねばならない。その徐陵の九錫文にみるのは、次代皇帝たるべき陳霸先の禮徳ある人

柄とともに、この軍閥豪族の「武勳」をも象徵する「山車澤馬」<sup>(43)</sup>なのである。さらにこのような王朝・皇帝の強い武力を讃える山車澤馬は、北齊の傀儡であつた蕭淵明の名を借り陳霸先に送つた徐陵の「爲貞陽侯與陳司空書」にみるそれにも共通する。

大齊の徳は天地に並び、明らかなること日月に符し、禮を隆し俗に詔げ、樂を張り民を被ひ、義を華夷に感ぜしめ、仁を造化に伴くす。玉羊銀甕、嘉瑞は必ず彰らかにし、澤馬山車、禎符は總に集う。

北齊の禮樂に則る徳政により異民族が感化され、天地が多くの瑞を出すとの場面に詠まれる玉羊は「樂」に關する瑞であり、それと一對ものとされる銀甕も『禮記』「山出器車」の鄭玄注では「山が出す禮器」とされることから、徐陵は禮樂に則る皇帝の徳治を嘉する儒家的祥瑞の一つとして山車を示すといえる。しかし、注目すべきは、その祥瑞描寫に續く次の文章である。

若し夫れ中原の猛士、本より自ら窮りなく、沙塞の精兵、斯れ何ぞ量あらんや。是を以て家國の富、文・景の未だ儔べからざるところ、兵馬の強、秦・漢の未だ敵ならざるところ。

漢の善政期を凌ぐほどの國の富めるさまを讃えたあと、北齊の軍勢力を「秦漢帝國に勝るもの」と嘉す文が續くことから、ここで徐陵の示す山車澤馬は、秦漢をも凌駕する北齊王朝の強大な軍力をも讃えるものであったと言えるだろう。

『陳書』の徐陵傳は、陳王朝の軍檄や詔冊などの政治的文書は徐陵の手になること、なかでも九錫文はその美しさが稱讃されたこと、世祖・高祖の時代の主要な國家的文書は彼が起草したことを傳える。その公文書作成にあつて徐陵は、新たな技巧を駆使した修辭的美文を以て軍人皇帝の功績を光り輝かせ、武力革命により成立した軍事王朝の正統性を神祕的かつ華麗に詠み上げた。儒家的禮制の頂にあるべき受命の天子の至徳とともにその武勳をも燦然と輝かす山車澤馬のイメージの礎は、先行する南朝の美文を繼承發展しつつ、當時、舊來の文體を新たにし北朝人までもが文宗とした徐陵の修辭的國家文書においてまず固められた、と言つて良い。

### 3 庾信における山車

#### — 武斷政治を美化するもの —

澤馬と一對の山車について、重要な役割を果たしたもう一人の文學者が、徐陵と併稱される美文家庾信である。山車澤馬は北朝に遷つた庾信が北周武帝のために作成した「三月三日華林園馬射賦」(以下、馬射賦)の序文に詠まれる。上巳の日に開催された「馬射の禮」という北朝獨自の年始儀禮を詠んだ賦であり、序に庾信自身が「潔齋の飲ではあるが、實際は、春の軍事教練のよう(雖行祓禊之飲、即同春蒐之儀。)」と言うように、皇帝による軍事閱兵式も兼ね併せた國家儀禮を嘉す文書でもあ

(48) 北周は鮮卑固有の復古主義を目指しながらも、周王朝を理想として『周禮』に基づく官制を採った。山車は、北周の武帝が『周禮』の精神に叶った徳治を行い、その王徳に對して多くの瑞が現れ、異族が歸順したことを讃する場面にみえる。

① 皇帝は上聖の姿を以てするは、下武の運を膺く。乾象の靈に通じ、神明の徳を啓く。夷は秩宗を典とし、これを三禮に見る。變は樂正と爲りて、これに九成を聞く。己に克つに禮容を備え、威風を戎政に摠ぶ。② 兵革會うこと無きは、丹鳥を待つこと有るに非ず。宮觀を移さざるは、故より白鷺を勞わすこと無し。銀瓮金船、山車澤馬。豈に止だ竹葦の兩草にして、共に甘露垂れ、青赤三氣、同まりて景星たるのみならんや。

上巳の宴との繋がりにから、北周武帝の徳治を嘉する山車澤馬は王融「三月三日曲水詩序」の澤馬器車からの繼承が推測されるが、直接の典據としては、徐陵の山車澤馬を考えるべきであろう。とくに山車澤馬の示される②の祥瑞描寫で北周武帝を讃える修辭をめぐり留意したいのは、金船銀甕の金銀の要素が、丹鳥白鷺の紅白の彩りと共に豊かな視覚的對偶として展開されること、戎政には禮容が組み合わされていることである。徐陵同様の徹底した對偶を用いる華麗な修辭の公用文において、北周の軍容を讃えるものとして示された山車澤馬は、皇帝の徳政と武勳の雙方を耀かす祥瑞イメージを顯在化しつつ、庾信に繼承

されたといえるだろう。

隋唐に掛けての南北の統一を可能とした要因に、西魏から北周に繼承された府兵制がある<sup>(50)</sup>。北周の宇文護は自らを周公旦に準え、周禮的府兵制により組織化された軍權を掌握した。その宇文護が擁立したのが、北周の武帝である。庾信が當賦で嘉するのは、『周禮』に則る府兵軍團を以て北齊・陳を壓し、華北統一を成し遂げた北周武帝の赫赫たる武勳であるが、しかし加藤國安氏は、勇壯さこそが馬射儀禮の中心であるはずの當賦の末尾が武ではなく禮を讃える辭で締めくくられる點について、次のように述べている。

宇文護主導による武治路線は、孝閔帝・明帝との厳しい權力闘争を経て確定したものであり、その象徴として、かくも盛大な馬射＝軍事セレモニーが開催されたものである。しかし武斷主義を強調しすぎて、政權の威信を下げてしまつていけない。北周王朝は、何よりも『周禮』の精神を再現せんとする王朝である。そのことを天下に布告する意味でも、當該賦の最後に「豈に情を戟枝に留めんや、惟だ揖讓の禮を觀るのみ」と、禮を尊重する世であることを強調する形になっているのだと考えられる<sup>(51)</sup>（傍線松浦）。

北周武帝の武斷政治をカモフラージュするため、庾信が當該軍事頌讚賦の末尾を古代の禮の發揚で纏めたという加藤氏の指摘を踏まえるとき、強大な「武力」に據りつつも「兵革無會」の

## 中國詩文論叢 第二十五集

治世を實現した北周武帝の「徳政」の徴として、庾信は「山車澤馬」を提示したものと思われる。

すでに徐陵によって軍人皇帝の徳政と武勳の雙方をシンボライズするものとなった山車澤馬は、北周の武力政治を『周禮』による徳治の稱揚によって美化する當該軍事賦において、その軍人皇帝の強大な軍力と武勳を讃えつつも、禮に則る徳政を印象づけ褒め稱えるのに最も適した祥瑞であったといえる。かくて強大な皇帝の武斷政治を否定しない形でその徳政を可視化する澤馬と一對の山車のイメージは、南朝美文の先驅者たる王融・沈約の公用文を経て、南朝末を代表する二人の美文家徐陵・庾信の國家頌讃文に大成した。

## 4 唐の封禪文に見る山車

## ——徐庾の山車澤馬からの繼承と展開

漢帝國崩壊後の亂世四百年を経て、再びの統一帝國を出現させる道筋をつけたのは、軍人皇帝の下に武斷政治を行った武川鎮軍閥（關隴集團）であった。<sup>(52)</sup>その武川鎮軍閥を支配層とする隋唐に至ると、山車は郊祀や封禪といった皇帝の祭天儀禮に現れるようになる。太宗期には實現できなかった封禪は、高宗の麟徳年間において、後漢以來、數百年の時を経て舉行された。

隋唐以降、山車が多く描かれる祭天關連文のうち、（１）太宗の御代に長孫無忌が封禪を薦めた文、（２）高宗の御代に許敬

宗により上表された封禪を薦める表の二例をみてみたい。

（１）伏し惟ふに皇帝陛下……山車は奔せ軫を疊ね、日馭の鳴鑾を促し、澤馬は躍し相ひ趨り、天駟の徐軻を微す。煙川は野を清らかにし、奕奕の阿に蓄洩し、薰風は途を驚かせ、云云の嶠に扇蕩す。其の冥兆たるや彼の如く、其の顯應たるや斯の若し。<sup>(53)</sup>

（２）伏し惟ふに皇帝陛下……是を以て圓精は鑾を朗かにし、欽明の同徳なるを瞻み、方祇は祉を効し、至仁の比義なるを祥す。薰風馳せ膏露驛し、靈心は置郵より急にして、澤馬驟せ山車驚せ、神物は推轂より切たり。<sup>(54)</sup>

澤馬と一對の山車が、甘露薰風、煙る靄といった天瑞と共に駢文を以て描かれるのは、徐陵「九錫文」の甘露慶雲、庾信「馬射賦」の甘露景星・三色の瑞氣など色鮮やかな天瑞と對となる山車澤馬と概ね一致しており、このような唐の封禪文にみる山車澤馬は、封禪舉行の要件である皇帝の治績を嘉する場面において、天地の出ず瑞として示される。初唐の文書——とくに頌贊文が徐庾を繼承することについては唐の文學評傳等にも明らかである。<sup>(55)</sup>唐以前の公用文における山車澤馬の用例が徐庾のみであることからしても、初唐の封禪文において、對偶を多用する駢文を以て詠まれた皇帝を言祝ぐ澤馬と一對の山車は、徐庾の公用文・國家頌讃文にみるそれを繼ぐものと言える。

他方、唐の封禪關連文に示された山車澤馬をめぐる新たな展



開としては、神仙道教的な仙境に描かれ、皇帝の武功を讃える表現は控えめになる特徴が認められる。<sup>(56)</sup>しかし初唐の頌讃文が徐庾を繼承することに加え、想記すべきは、初唐の史書の皇帝本紀に初めて實際の出現例として記録される「戦勝を導く吉兆」としての山車の瑞が、「武力」のイメージを基盤とすることである(244参照)。さらに近年の研究では、初唐に企圖された封禪は、周邊諸國の軍事的平定後、唐王朝の皇帝權力を國內外に誇示する重要な政治的儀禮として機能したことが注目される。<sup>(57)</sup>これらの点を總合すれば、該期の封禪文に掲げられた澤馬と一對の山車にも、大唐帝國の王權を支えた強い軍事力のイメージを認めるのが妥當であろう。<sup>(58)</sup>

### 結びにかえて——亂世を統べるかたち

以上、祥瑞としての山車を漢唐間の社會文化とともに辿ってきたが、山車の瑞の誕生と受容をめぐっては、それを共有した時代の社會文化的土壌のみでなく、そのイメージを確立した文學者の存在を忘れてはならない。祥瑞としての山車は、六朝末から隋唐に掛けて現れた軍人皇帝たちの武功を、その至徳と矛盾しない形で言祝いだ南朝美文——とくに徐陵・庾信の優れた修辭的國家文書を経て初めて、唐には儒家的禮制秩序の頂點にあるべき皇帝の至徳と武勳を燦然と輝かす重要な瑞として國家文書に詠まれ、國家行政法典には「大瑞」として記録されるに

至ったものと考えられる。

しかしさらに巨視的な觀點からみれば、漢には確認することの出来ない「山車澤馬」という車馬の瑞が、唐には強い皇權を嘉する祥瑞へと醸成された要因は、その誕生の土壌となった漢唐の間に横たわる魏晉南北朝という時代が、禪讓という美名の下になる武力革命が繰り返され、亂立した短命の王朝の受命の正統化が立て續けに試みられた「亂世」であった點に求めることができるだろう。前漢の司馬相如の封禪文において漢徳を嘉する瑞として選ばれた「騶虞・白麟・黃龍」は、こうして、激動の魏晉南北朝を経て初唐に再開された封禪文に至っては、再びの統一帝國を統べる強大な皇帝權力を言祝ぐ「山車澤馬」に代替されることとなった。<sup>(59)</sup>中國史上、未曾有の亂世たる魏晉南北朝四百年を「武」により統一し、結果的に、「偃武修文」の世をもたらすこととなった強い皇權を象徵する「祥瑞としての山車」は、「亂世を統べるかたち」であったと言えるのではないか。

### 【注】

- (1) 『大唐六典』卷四「尚書禮部」に「凡祥瑞應見、皆辨其物名。若大瑞(大瑞謂景星、慶雲、黃星、真人、河精、麟、鳳、鸞、…山車、象車、鳥車、根車、金車…)。皆爲大瑞。上瑞(略)・中瑞(略)・下瑞(略)、皆有等差。

## 中國詩文論叢 第二十五集

若大瑞隨即表奏、文武百僚詣闕奉賀。其他並年終員外郎具表以聞、有司告廟、百僚詣闕奉賀。」とあるように、上ノ下瑞は年末に纏めて奏上するのに對し、大瑞のみ即時上奏すべき重要な瑞とされた。その大瑞には、「山車」を筆頭とする車の祥瑞が多くみえるもののそれらに關する解説はない。

(2) 例えば『大漢和辭典』や『漢語大詞典』の「山車」の項目でも、(a)(b)の二種に大別する。このうち(b)の百戲(散樂)と共に描かれる山車は、日本の山車のルーツの一つとされる(植木行宣『山・鉾・屋臺の祭り―風流の開花』序章二「山車」再考」白水社二〇〇一ほか参照)。

(3) 山車の圖像をめぐる研究は、唐・薩守眞『天地瑞祥志』に見る「山車」の傍題を持つ目下唯一の祥瑞圖【圖】を手がかりに、海寧畫像石墓に見る山型の圖が山車の瑞である可能性を採った拙稿「山產玉璧」再考——海寧三國畫像石墓中的山車圖像研究(華東師範大學藝術研究所『中國美術研究』二〇一六年第四期(總第二十輯)二〇一七年一月發行豫定)がある。

(4) 拙稿「關於瑞祥志中可見的似鳳四凶鳥(發明、焦明、鸛鷁、幽昌)之來歷——以日本前田尊經閣文庫本『天地瑞祥志』引『樂斗圖』爲端緒」『興大中文學報』第二十七期増刊、二〇一〇(日本語版は拙著『漢魏六朝における『山海經』の受容とその展開』「圖像篇」第二章、汲古書

院二〇一二に加筆補正の上所収)、孫英剛氏「祥瑞抑或羽孽…漢唐間的「五色大鳥」與政治宣傳」『史林』二〇一二等。

(5) 『周禮注疏』卷第五十「匠人」「柏車轂長一柯、其圍二柯、其輻一柯、其渠二柯者、三五分、其輪崇、以其一爲之牙圍。」鄭玄注「柏車山車、輪高六尺、牙圍尺二寸。」上海古籍出版社二〇一〇。

(6) 漢代の張衡「西京賦」に示される魚龍漫衍という百戲の一場面「含利颺颺、化爲仙車、驪駕四鹿、芝蓋九葩。」に見る仙車を山車の誤寫とする説もある(榎一雄「黎軒・條支の幻人(三)」『季刊東西交渉』第八號、一九八三)。とすれば、これは山車の語の初見であるとともに、百戲の山車が山車の瑞に先行することを立證する重要な論據となるが、目下、百戲に關わる山車の語の初見は隋を遡らず、魏晉迄に成立したと思われる祥瑞としての山車の語の用例に遅れる。他方、百戲に關わる「仙車」の語は、『魏書』卷一〇九「樂志」「天興六年冬、詔太樂・總章・鼓吹增修雜伎・造五兵角觝・麒麟・鳳皇・仙人・長蛇・白象・白虎及諸畏獸・魚龍・辟邪・鹿馬仙車…五案以備百戲。」など北魏に確認されることのほか、『西京賦』や『魏書』の百戲の場面で鹿に曳かれるものとされる仙車が、神仙的な世界を描いた漢畫像石に多く見る「鹿の引く仙人の車」に通じる點などから、筆者(松浦)は「西京賦」の仙車は「鹿の曳く仙界の車」の意であり、山車

の誤寫ではないと考える。なお「祥瑞としての山車」の語の成立を承け、北齊・隋に至って初めて百戲の仙車が「山車」の語に置き換えられた可能性のあることについては、稿を改めて検討したい。

- (7) 『拾遺記』卷一「軒轅黃帝」「軒轅出有熊之國。母曰昊天、以戊巳之日生、故以土德稱王也。時有黃星之祥：泛河沉璧、有澤馬羣鳴、山車滿野。」

- (8) 『廿二史劄記』卷七「九錫文」「每朝禪代之前、必先有九錫文、總敘其人之功績、進爵封國、賜以殊禮、亦自曹操始。其後晉・宋・齊・梁・北齊・陳・隋皆用之。其文皆鋪張典麗、爲一時大著作、故各朝正史及南北史俱全載之。」商務院書館一九五八。

- (9) 『三國志』卷三十八裴松之注引『魏略』『王朗與文休書』中華書局一九九八。松浦千春「禪讓儀禮試論」漢魏禪讓儀式の再検討』『一關工業高等專門學校研究紀要』四十・二〇〇五参照。

- (10) 『徐陵集校箋』卷十二「冊陳公九錫文」「是以天無繇寶、地有呈祥、涵露卿雲、朝團曉映、山車澤馬、服馭登閑、旣景煥於圖書、方歲蕤於史牒。高勳踰於象緯、積德冠於嵩・華、固無德而稱者矣。」中華書局二〇〇八。

- (11) 歷代九錫文では漢↓魏〔潘勗〕無し、魏↓晉〔阮籍?〕無し、晉↓宋〔傅亮〕は霄漢・龍・鳳、宋↓南齊〔王儉〕は景星・秬草・鳳・龍、宋↓梁〔任昉?〕は玉石等の祥瑞が描かれるが、山車澤馬の用例はない〔正史及び『漢祥瑞としての山車』(松浦)

魏六朝百三家集』等参照)。魏晉以降の九錫文の作者については、宮川尚志「禪讓による王朝革命の研究」『六朝史研究 政治・社會篇』一九九二ほか参照。

- (12) 王融「三月三日曲水詩序」「天瑞降、地符升、澤馬來、器車出、紫脫華、朱英秀、佞枝植、歷草孳、雲潤星暉、風揚月至、江海呈象、龜龍載文。」『文選』集英社一九七四。

- (13) 『徐陵集校箋』中華書局二〇〇八、一五五頁。

- (14) 司馬相如「封禪文」「然後囿騶虞之珍羣(騶虞)、徼麋鹿之怪獸(白麟)、導一莖六穗於庖、犧雙觝共抵之獸(白麟)、獲周餘珍放龜于岐、招翠黃乘龍於沼(黃龍)。：欽哉符瑞臻茲、猶以爲德薄。不敢道封禪。蓋周躍魚隕航、休之以燎。微夫此之爲符也。以登介丘、不亦慙乎。進讓之道、其何爽歟?(括弧内松浦)」小尾郊一『文選』集英社一九七四参照。

- (15) 『文心雕龍』卷五「封禪」「觀相如封禪、蔚爲唱首。爾表其權輿、序皇王、炳玄符、鏡鴻業、驅前古于當今之下、騰休明于列聖之上：歌之以禎瑞、讚之以介邱。絕筆茲文、固維新之作也。」

- (16) 保科季子「受命の書―漢受命傳説の形成」『史林』八八、二〇〇五等参照。

- (17) 渡邊義浩「後漢儒教の固有性―『白虎通』を中心として」(同氏『兩漢の儒教と政治權力』汲古書院二〇〇五)等参照。

- (18) 『白虎通疏證』卷六「封禪」「天下太平、祥瑞所以來至者、以爲王者承統理、調和陰陽、陰陽和、萬物序。休氣充塞、故符瑞竝臻、皆應德而至。德至天、則斗極明、日月光、甘露降；德至山陵、則景雲出、芝實茂、陵出異丹、阜出蓮莆、山出器車、澤出神鼎。」中華書局一九九四。
- (19) 『白虎通疏證』の清の陳立案語では、一連の祥瑞描寫は概ね『孝經援神契』を典據とすること、『文選』引『孝經援神契』「德至山陵、則澤出神馬」の記述があることから神馬は神馬の誤りであるとし、『藝文類聚』引當該文が神馬に作られるのもこのためとする。今、陳說に従う。
- (20) 『白虎通疏證』卷六「封禪」「太平乃封、知告於天、必也於岱宗何。明知易姓也。刻石紀號、知自紀於百王也。燎祭天、報之義也。望祭山川、祀群神也。」
- (21) 秦漢には皇帝の不老長壽を願う個人的・神仙呪術的特徴が強いものであった封禪は、前漢の武帝を経て後漢の光武帝の封禪に至り、國家的思想宗教へと變容を遂げつつあった儒教を基盤に、政治的效果を意識した運用がなされるようになったとされる。(溝口雄三他編『中國思想文化事典』「祭祀」他参照。)
- (22) 劉宋には佛教的な祥瑞が多く出現し、政治的にも大きな影響を持つようになる(板野長八「劉裕受命と佛教的祥瑞」『東方學報東京』十一の一・一九四〇等参照)。しかし例えば『宋書』符瑞志や『南齊書』祥瑞志に早い記録例のある白象や白鸚鵡などの佛教的祥瑞は、歴代の九錫文のような儒家的な國家文書において、皇帝の受命を嘉する瑞として詠まれることはない。
- (23) 森野繁夫「王融の『三月三日曲水詩序』について」『小尾博士古稀記念中國學論集』汲古書院一九八三。
- (24) 『南齊書』卷四七「王融傳」「九年、使融爲曲水詩序。文藻富麗、當世稱之。」
- (25) 徐陵に先驅ける梁・任昉「策梁公九錫文」が四字句中心の古典的な文體で構成されるのに對し、徐陵の九錫文は四字句を基調としつつも、四六隔對の他六字句の對を連用したり七字句の對を交えるなど、舊來の九錫文の文體リズムからの脱皮を志向するという。(道坂昭廣「徐陵の駢文について」『人文論叢(三重大學)』第十一號、一九九四。)
- (26) 六朝美文における對偶の重要性については、福井佳夫『六朝美文序說』汲古書院一九九八他参照。
- (27) 同じ受命を嘉す政治的文章であっても、例えば司馬相如「封禪文」や王融「曲水詩序」と比べると、舊來の九錫文に詠まれる祥瑞の數や種類は多くはない(注十一參照)。これに對し徐陵の九錫文には、とくに陳霸先の功績羅列の末尾の場面において、王融「曲水詩序」同様、『禮記』や禮緯由來の儒家的祥瑞を多く詠む特徴が認められ(山車・澤馬・滂露・卿雲)、全編通じて詠まれる祥瑞の種類と數も歴代九錫文のうち最も多い(黃龍・白

雀・天馬等)。

- (28) 『續漢書』第二九「輿服上」「夫禮服之興也、所以報功章德、尊仁尚賢。故禮尊尊貴貴、不得相踰、所以爲禮也。非其人不得服其服、所以順禮也。順則上下有序、德薄者退、德盛者繹。故聖人處乎天子之位、服玉藻遽延、日月升龍、山車金根飾、黃屋左纁、所以副其德、章其功也。」中華書局一九九八。

- (29) 『論語』「衛靈公第十五」「顏淵問爲邦。子曰、行夏之時、乘殷之輅、服周之冕。樂則韶舞、放鄭聲、遠佞人、鄭聲淫、佞人殆。」

- (30) 『太平御覽』卷七七四「車部三・輅」引董巴『輿服志』「①殷瑞山車、金根色。殷人以爲大輅。②於是秦皇作金根之車、漢承秦制爲乘輿。卽孔子所謂乘殷之輅也。」①②は司馬彪の輿服志の該當箇所と重なるが、傍線部のみ司馬彪にはない説明が傳えられる。(句讀點松浦)
- (31) 金根については『續漢書』第二九「輿服上」「殷瑞山車、金根之色」劉昭注引「乘馬賦注曰…金根、以金爲飾。」に従う。

- (32) 『禮記』「樂記」「所謂大輅者、天子之車也。」

- (33) 董巴が殷の瑞を金根車の前身として輿服志に採録する背景としては、彼が符瑞による漢魏禪讓劇の推進者であったことを考慮せねばならぬ。漢の獻帝から禪讓を受けようとしぬ曹丕に、董巴が符瑞の徴などを以て禪讓を迫ったことについては『宋書』卷二七「符瑞志上」参照。

祥瑞としての山車(松浦)

- (34) 『藝文類聚』卷七一「車」には「禮斗威儀」「山車垂句。山車者、自然之車也。句者曲也。不揉治而自員曲、故言垂句。」

- (35) 『宋書』卷一九「符瑞志下」「山車者、山藏之精也。不藏金玉、山澤以時、通山海之饒、以給天下、則山成其車。闕。」「天地瑞祥志」第十七「山車」では「孫氏瑞應圖」の佚文とする【圖】。

- (36) 祥瑞の専門志を持つ正史は通史的に見ても『宋書』「符瑞志」「南齊書」「祥瑞志」のほか『魏書』『靈徵志』のみ。

- (37) 安田二郎「南朝の皇帝と貴族と豪族・土豪層―梁武帝の革命を手がかりに」『中國中世史研究』東海大學出版會一九七〇。(同氏「六朝政治史の研究」京都大學出版會二〇〇三に「梁武帝の革命と南朝門閥貴族體制」と改題して收録。)

- (38) 梁初の文壇において後進に對し主導的な影響力を持った沈約が、徐庾を中心に形成された宮體の先鞭を付けたことについては、興膳宏「艷詩の形成と沈約」『日本中國學會報』二四、一九七二參照。

- (39) 『周禮注疏』卷第三十二「車僕」「車僕、掌戎路萃…」鄭玄注「此五者皆兵車、所謂五戎也。戎路、王在軍所乘也。」

- (40) 魏晉以降の九錫文の九錫下賜の場面には必ず「是用錫公大輅、戎輅各一。」とあり、大輅と戎輅が次王朝の皇

## 中國詩文論叢 第三十五集

帝へ下賜される車として示される。これに對し、漢の九錫文の該當箇所には戎輅は見えない。(漢張純「九錫文」「束帛加璧、大國乘車、安輅一、驪馬二、駟下二駟。」)

- (41) 後漢の封禪に由來する「車馬」の瑞が魏晉以降の「受命の皇帝」を言祝ぐ文書に多く詠まれることや、魏晉以降の史書において「皇帝の金根車」が殷の山車という神話的な「車の瑞」と結び神格化されるのも、魏晉以降の九錫文に示された「受命の皇帝」の象徴物たる「車」のあり方に、時代的にも内容的にも符合する。

- (42) 徐陵「冊陳王九錫文」「義軍大眾、俱集帝京、逆豎兇徒、猶屯皇邑。…軍容崑穆、國政方修、物重觀於衣冠、民還瞻於禮樂。…此又公之功也。…自八紘九野、瓜剖豆分、竊帝偷王、連州比縣。公武靈已暢、文德又宣、折簡馳書、風猷斯遠。…此又公之功也。…公有濟天下之勳、重之以明德、凝神體道、合德符天。…功成治定、樂奏《咸》《雲》；安上治民、禮兼文質。…(以下續く山車澤馬を含む一文は、注10参照)。」

- (43) 『徐陵集校箋』卷七「爲貞陽侯與陳司空書」「大齊德竝天地、明符日月、隆禮詔俗、張樂被民、義感華夷、仁侔造化。玉羊銀甕、嘉瑞必彰、澤馬山車、禎符總集。」

- (44) 『玉函山房輯佚書續編三種』所收孫柔之「瑞應圖」「玉羊瑞器也。鍾律和調五聲當節則玉羊見。又曰晉平公時師曠至玉。」上海古籍出版社一九八九。

- (45) 『徐陵集校箋』卷七「爲貞陽侯與陳司空書」「若夫中原

猛士、本自無窮、沙塞精兵、斯何有量。是以家國之富、文・景所未儔、兵馬之強、秦・漢所未敵。」

- (46) 『陳書』卷二十六「徐陵傳」「自有陳創業、文檄軍書及禪授詔策、皆陵所製、而九錫尤美。爲一代文宗、亦不以此矜物、未嘗詆訶作者。其於後進之徒、接引無倦。世祖・高宗之世、國家有大事、皆陵草之。」中華書局一九九七。

- (47) 『陳書』卷二十六「徐陵傳」「其文頗變舊體、緝裁巧密、多有新意。每一文出手、好事者已傳寫成誦、遂被之華夷、家藏其本。」

- (48) 當作品が北周の軍事的威勢を言祝ぐ目的で作成されたことについては、許東海『庾信生平及其賦之研究』文史哲出版社一九八四等参照。

- (49) 『庾子山集注』卷之一「三月三日華林園馬射賦」「①皇帝以上聖之姿、膺下武之運、通乾象之靈、啓神明之德。夷典秩宗、見之三禮；變爲樂正、聞之九成。克已備於禮容、威風摠於戎政。…②兵革無會、非有待於丹鳥；宮觀不移、故無勞於白鷺。銀釜金船、山車澤馬。豈止竹葦兩草、共垂甘露；青赤二氣、同爲景星。」中華書局一九八〇。

- (50) 谷川道雄『隋唐帝國形成史論』筑摩書房一九七一、川勝義雄『魏晉南北朝』講談社學術文庫二〇〇三、等参照。

- (51) 加藤國安『越境する庾信(下)——その軌跡と詩的表現』研文出版二〇〇四、六八〇頁。



(52) 陳寅恪『唐代政治史述論稿』一九四四等參照。

(53) 『唐會要』卷七「封禪上」所收、長孫無忌による封禪文。「伏惟皇帝陛下：奔山車而疊軫、促日馭之鳴鑾、躍澤馬而相趨、微天駟之徐軻。煙川清野、蓄洩奕奕之阿、薰風驚途、扇蕩云云之嶠。其冥兆也如彼、其顯應也若斯。」世界書局一九六三。

(54) 『文苑英華』卷五百五十六「封禪」、許敬宗「勸封禪表」  
「伏惟皇帝陛下：是以、圓精朗鑒、瞻欽明之同德、方祇效祉、祚至仁之比義。馳薰風而驛膏露、靈心急於置郵、驟澤馬而驚山車、神物切於推轂。」『文淵閣四庫全書電子版』上海人民出版社他。

(55) 徐庾の美文が初唐文學に與えた影響については「唐興、文章承徐庾餘風、天下祖尚。〔『新唐書』卷一百七「陳子昂傳」〕、「先是、文士撰碑頌、皆以徐庾爲宗、氣調漸劣。〔『舊唐書』卷一百九十「文苑傳中」〕等。

(56) 『嵩陽石刻集記』唐二「封祀壇碑并序」  
「山車澤馬、湊仙掖而駢闐、丹甃黃銀、擁神州而駢驛。」「冊府元龜」  
「帝王部」三十六「封禪第二」  
「伏惟高祖、太祖皇帝……太宗文皇帝……人神以合、祥瑞畢臻、巢鳳下窺、遊麟易擾。山車澤馬、遠服瑤池之駕；醴泉甘露、近充上壽之尊。」等。

(57) 秦漢の封禪と異なり、周邊諸國を集め公開された唐の封禪は、唐王朝の政治經濟的實力誇示の場でもあったとする麥谷邦夫氏の指摘（同氏「唐代封禪議小考」二〇〇

祥瑞としての山車（松浦）

五）を深化させたのが、笠松哲氏である。氏は、突厥や朝鮮半島の諸國等、軍事的平定を経て唐に歸順した周邊諸國の封禪への參列記録等を手がかりに、唐の高宗の封禪は、皇帝が周邊民族との間に君臣關係を締約し、自らの統治する天下秩序を形成する會同儀禮であったとする（同氏「天下會同の儀禮―唐代封禪の會盟機能について」『古代文化』六十一、二〇〇九）。

(58) 武功を嘉する山車澤馬の用例は清代にも見ることができることからも（清『欽定千巽宴詩』卷二十八「聖人久道臻化成、武功著定文德明。自昔、山車澤馬應期出、孰如今日。」）、山車の持つ「武力」の要素は六朝末で收束したものとは考えがたい。

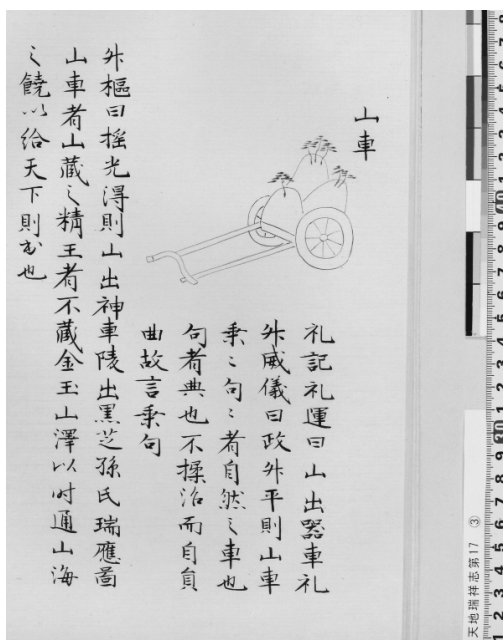
(59) 司馬遷「封禪文」末尾の頌文に漢德の象徴として掲げられる「騶虞（般般之獸）・白麟（濯濯之麟）・黃龍（宛宛黃龍）」は、漢の受命や祭天儀禮に關わる嚴選された主要な瑞であり、武帝の封禪の根據として封禪文の本文中にも詠まれる（注十四參照）。白麟は『漢書』等に武帝の郊祀に現れたとされ、漢の土德の象徴とされる黃龍は『史記』「封禪書」に多くみえる。騶虞は早く『周禮』や『詩經』に出現する義獸だが、『史記』「滑稽列傳」には武帝がこの珍獸を見に行ったことが記録される。）

(60) 太宗・高宗の封禪上表文において「伏惟皇帝陛下」から始まる皇帝の功績を嘉す場面に描かれる祥瑞のうち、唐以前の封禪文には用例がなく、最も多く詠まれる新

## 中國詩文論叢 第二十五集

な瑞は「山車澤馬」のみである（『唐會要』『封禪』『文苑英華』『封禪』『冊府元龜』『封禪』参照）。司馬遷・封禪文に詠まれた「騶虞・白麟・黃龍」が漢徳を嘉する瑞として、白魚に象徴される周徳との差異化を目的に選ばれたものであるように、初唐の封禪文における山車澤馬もまたランダムに示されたものではなく、統一帝國たる唐王朝の禮制に基づく強大な皇權を内外に誇示する政治的表象として選ばれた祥瑞であったとすべきだろう。なお則天武后の封禪文に至り山車澤馬が詠まれなくなるのは、その封禪が佛教的世界觀に基づくことや（笠松哲「金輪王、封禪す—武后の君主權と封禪」二〇一二参照）、本論緒言に示した（b）百戲に見る山車の興隆とも關わるものと考えられる。

【圖】前田尊經閣文庫藏『天地瑞祥志』第十七「山車」の傍題付き圖と經文（禁轉載）



【附記】本稿は日本學術振興會科學研究費（基盤研究B）平成二十八年—三十一年度、課題番號 H1603466（代表・水口幹記）「前近代東アジアにおける術數文化の形成と傳播・展開に關する學際的研究」の研究助成を受けた成果である。